

ハイデルベルク信仰問答より

問 97 では、私たちはどのような画像をも、少しもつくってはならないのですか。

答え 神は、どのような方法によっても描き出されることはできませんし、またそうすべきではありません。被造物については、描き出されてもよいのでありますが、崇めたり、あるいはそれを用いて神に仕えたりするために被造物の模造のいかなるものも、つくったり、所有したりすることを、神は禁じておられるのであります。

第二戒 あなたは刻んだ像を作ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、地の下の水の中にあるすべてのものの、いかなる形をもつくってはならない。あなたはそれらにひれ伏し、それらに仕えてはならない。それは、主なるあなたがたの神である私が、ねたみ深い神であるからである。私を憎む者については、父の罪を子に報いて三、四代まで罰するが、私を愛し、私の戒めを守る者については、千代までも不動の愛を示すであろう。

ここでは神を形にすることだけでなく、形あるものを神とすることの問題が扱われています。まず、神を「描き出す」ことが禁じられていますが、これについては前回学びましたので、今日は後半の「被造物を描き出す」こと（形あるものを神とすること）について考えてみましょう。

まず「被造物については、描き出されてもよい」と言われています。太陽、月、星、山、川、海、動物、植物、人間……目に見えるあらゆるものを描くことが許されています。しかし、その描かれる目的が崇拜の対象となると、それは神の禁じ給うところのものとなります。「崇めたり、あるいはそれを用いて神に仕えたりするために被造物の模造のいかなるものも、つくったり、所有したりすることを、神は禁じておられる」。どんなに荘厳な絵画であっても、それ自体を拝んではいけなし、「お守り」のように自宅に飾っておいてもいけないのです。絵が飾られているとき、それが何のために飾られているか、所有者がその絵についてどういう説明をするかに気を配らなくてはなりません。

日本人の古い習慣として、「御先祖様が見守ってくださっている」という意識で遺影を飾るしきたりがありますが、亡くなった家族の写真を飾る上でそのような意識を持っていると、そこには同質の問題が潜んでいるかもしれません。

この箇所を学びながら、「キリスト者としての意識」「信教の自由」「異教徒の意識」を整理しておく必要があると感じました。十戒が適用される場所は「聖書信仰に立つ人々」であって、すべての人に対してではありません。しかし、伝道によってすべての人を聖書信仰へと導くことは求められています。異教徒の人々が何らかの絵画を拝する姿を見るとき、キリスト者は同じようにすべきではありません。しかし、異教徒の人々のそのような行為を心の中で蔑むべきでもありません。それは信教の自由に基づく判断であります。

【「信教の自由」を守る】（櫻井園郎ホームページより引用）

- ①すべての人は、自己の信仰を貫く「信教の自由」を有します。
- ②すべての人は、他人の信仰を尊重し、誹謗中傷し、否定禁止しない「信教の自由」を守る義務を有します。
- ③すべての人は、自己の信仰する宗教を最高に尊重する「信教の自由」を有します。
- ④自己の「信教の自由」を主張する者は、それと同時にかつそれと同様に、他人の「信教の自由」を守ります。
- ⑤他人の「信教の自由」を否定することは、自己の「信教の自由」の否定につながるからです。
- ⑥したがって、宗教の信仰者は、自己の信仰を高揚すると同時に、それと同様に、「信教の自由」として、他人の信仰を尊重します。

これらの原則に立つとき、キリスト者は自らが立つ聖書信仰に基づいて、あらゆる偶像崇拝を避ける自由と責任があることが分かります。周りで多くの異教徒の人々が、キリスト者が「神」と見なさないものを拝礼していたとしても、そうしない自由と責任があります。同時に、自分の信仰と信念に立つ行為を異教徒に強要することもできません。異教徒の人が聖書信仰へと導かれたとき、神ならぬものを拝んではならないことを教え導く責任が生じます。

異教徒との関わりにおいて、聖書信仰に立つ者のあり方が学べる記事があります。それは、叔父ラバンとの決別のときに彼と契約を結んだヤコブの態度です。

ラバンはまたヤコブに言った。「この石塚を見なさい。私がお前との間に立てたこの柱を見なさい。この石塚は証しであり、この柱もまた証しなのだ。害を加えようとして、私がこの石塚を越えてお前の方に行くことがなく、お前がこの石塚と柱を越えて、私の方に来ることがないためである。アブラハムの神とナホルの神、彼らの先祖の神が私たちの間を正しく裁いてくださるように。」ヤコブは父イサクの畏れる方にかけて誓った。ヤコブは山でいけにえを献げ、一族の者を食事と呼んだ。そこで一同は食事をして、山で夜を過ごした。（創世31:51-54）

ラバンは一見ヤハウエ信仰に立っているように見えますが、その実は異教徒であり偶像を保有していました（31:30）。彼が言う「アブラハムの神とナホルの神」という表現には「それぞれの神」という多神教的な意味が含まれています。それに対してヤコブの「父イサクの畏れる方」という表現には「一人の神」という意味合いが強く現れています。ヤコブはこのとき、ラバンの信仰の持ち方を否定することなく、自分の信仰を表明しています。この姿勢は、私たちがキリスト者として異教徒の人々と接する際の参考になるでしょう。